

藤原宮跡から 新種の貨幣発見



須恵器とそこに納められていた富本銭と水晶

本誌では、149号(1999年11月刊行)で、「わが国最古の貨幣・富本銭発見」とご紹介したが、このほど奈良県橿原市の藤原宮跡から出土した「富本銭」が先の飛鳥池遺跡から出土したものと異なる新種であることがわかった。

今回出土したのは、藤原遷都の地鎮に使われたと見られる須恵器の注ぎ口に詰まっていた9枚の富本銭である。須恵器は平瓶状で口の下端径は2.1×1.9cmと極端に狭く、径2.4cmの富本銭は平瓶の胴体内部には入らない。飛鳥藤原地域から出土する平瓶としては異例の口の狭さであり、意図的に祭祀に用いた可能性が考えられた。さらに平瓶内部からは9個の水晶が見つかった。銭はさびで相互に硬く固着しており、7枚を分離できたが、最も上の1枚目と次の2枚目は分離できず、最終的に8個体に分離された。

分離された富本銭は、飛鳥池のそれとは字体が大きく異なることが判明した。その違いはX線透過写真によって明瞭に確認でき、7枚すべてが同一字体であることが明らかになった。また、違いは文字にとどまらず、飛鳥池遺跡のものと比較すると左右の七曜文を構成する円点(粒)が大きく、中でも中心点がひときわ大きく表現され、方孔を囲む内郭の幅が広いなどの特徴を持っている。飛鳥池の富本銭は「富」の字がウ冠だが、今回のそれは第1画の点がなく、ウ冠でつくられている。

また、飛鳥池の富本銭は、平均径2.44cm、平均重量4.36gだが、今回のものは大きさはほぼ同じだが、平均重量は6.77gあり、重量感あふれる富本銭である。

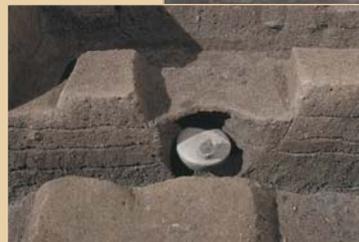


奈良文化財研究所都城発掘調査部部長 松村 恵司氏

今回の発掘と調査を指揮された奈良文化財研究所都城発掘調査部部長・松村恵司氏は言われる - 日本書紀には694年3月、おおやけのあそんまろ「大宅朝臣麻呂らを以て、しゆせん鑄銭司(造幣局)に拝す」と記述しています。続日本紀にも699年12月「始めて鑄銭司を置く」と見えます。



藤原宮南門基壇全景



須恵器の出土状態



今回出土した藤原宮の富本銭と書体



飛鳥池遺跡の富本銭と書体



「今より以後、必ず銅銭を用いよ」



日本書紀683年の一文

日本書紀の683年に「今より以後、必ず銅銭を用いよ」と記されたのが飛鳥池遺跡出土の富本銭と見られます。694年の遷都を機に、鑄造場所が飛鳥池遺跡から藤原宮内の鑄銭司へと移ったのではないのでしょうか -